

一万円札や五千円札は、どのくらいの重さのものだろうか。一グラム——いや、そんなにないだろう。五百ミリグラム？ あんな薄い紙なんだから、もつと軽いかな。駅の階段を下りながら、しきりとそんなことを考えていた。今夜使ったお金は、トータルすると何グラムになるだろう？

酔っているので、頭がうまくまわらない。階段を下りきったところで、強い木枯らしにあおられてたたらを踏み、駅舎の壁に背中をぶつけてしまった。

(遠山逸子さん、今日はダウンであります……)

自分で自分に咬くはいて、へへへと笑った。よいしょと身体を起こし、アパートの方向へと足を向ける。駅から歩いて十五分の道のりが、今夜はとりわけ遠く感じられた。

総務課の女の子だけで早めの忘年会を開くのは、毎年の習慣だった。今年は川田聡美かわたさとしみと、入社一年日の女の子ふたりが幹事になり、手配を整えてくれて、ようやく本日の大パーティー開催の運びとなったという次第だ。

それでも、高い会費の割には、あまり面白くはなかった。みんな同じように感じているのじゃないかと思う。お互いの顔に、アインラインよりもはつきりと、そう書いてあった。逸子も、だから飲み過ぎてしまったのだろう。

駅から逸子の暮らすアパートにたどりつくまでに、四つの角を曲がらねばならない。ひとつ目は、午後九時で閉まってしまふ弁当屋の角。ふたつ目は、夜遅くまでシャッターの向こう側で動力音をたてていること多いオートガレージ店の角。でも、この店も外の看板の明かりは早くに消してしまうので、したがってこの道筋に人気はなく、あたりを照らすものといえば街灯の明かりばかりだ。

夜道を歩くことは、それほど怖くない。これまでにも、危ない思いなどしたことはなかった。それはこの町が、古くから住み着いている人たちの多いところで、逸子もそのひとりである賃貸アパート族やマンション族の比率が低いからだろう。余所者よそものが入り込みにくい町は、それだけ治安もいいのだ。

だが、反面、この町には年寄りが多い。地着じっきの住人が多いのだから、これは当然だ。それで面白いことがあったのを、逸子は思い出した。もう二カ月ほど前のことになる。

やっぱり終電車で帰ってきて、ちょうどこのあたりにさしかかったとき、白いエプロンをかけた小柄なおばさんが駆け寄ってきて、息をきらしながら、このあたりでおじいさんを見かけなかったかと声をかけてきたのだ。

「うちのお義父さんなんだけど、ボケててね。夜中でもなんでも、すぐにふらふら出歩くんですよ」

おばさんは困り果てているようだったが、逸子はそんなおじいさんなど見かけなかったので、そのように答えた。おばさんは礼を言って、駅のほうに駆けていった。

それから数日後、スーパーに買い物に行ったとき、偶然、またそのおばさんを見かけた。腰の曲がった小さなおじいさんの手をひいて、菓子売場でチョコレートを買っていた。おじいさんは、おばさんをつないでいないほうの手に、赤い玩具のラッパを握っていた。ときどき、それをプツプツと吹いた。まるつきり、子供に戻っていた。

（徘徊老人の世話は、大変だなあ……）

故郷にいる両親のことをちらりと頭に思い浮かべて、逸子は少し、暗い気持ちになったものだった。

みつつ目の角を曲がると、小さな商店街に出る。午前一時というこの時刻では、大半の店が閉まっているが、ただここには、街灯のほかに、煙草や清涼飲料の自動販売機の明かりと、もうひとつ、逸子の前方を明るく照らす光源があった。二十四時間営業のコ

ンビエンス・ストアである。しいんと静まりかえった暗い町並みのなかに、看板が明るく輝き、総ガラス張りの店舗のなかに、人の動きが見える。黄色い上っ張りを着た店員の姿と、ほかに客が二、三人。

『QアンドA』という冗談みたいな店名を持つこのチェーン・ストアは、業界のなかでも弱小なのだろう。営業している店舗を、ほかの町では見かけたことがない。

逸子の町にあるこの店も、だいぶ苦戦をしているようだ。お客は入っているけれど、あちらにある『セブーンイレブン』、こちらにある『ミニストップ』に比べると、やはりお寒い感じは否めない。

それでも、『QアンドA』の明かりが近づいてくるにつれて、そこへ立ち寄っていきたい気分になってきた。今夜に限らず、飲み会やコンパがあったときは、帰り道で必ず『QアンドA』に寄ってしまう。大勢でワイワイ騒いだあと、アパートに帰り着くころになると小腹が空いてくるという、タイミングの問題もあるのだろうし、どんなに不満足なコンビニであっても、それが通り道にある限りは、逸子は地の利に惹きつけられてしまうということなのだろう。

自動ドアは、がああという音をたてて開いた。

「いらっしやいませ」

レジの店員は、素早く声をかけてきた。アルバイト学生なのだろう。若い店員で、こ

の店では新顔だった。ここで働くようになって、まだ半月足らずだろう。

店員は熱心に伝票を揃えている。逸子は買い物始めた。暖気で、かじかんでいた指も頬も温かくなってきた。店内の買い物カゴは、店員の制服と同じく真つ黄色だ。それを手にとつて、シオルダーバッグを肩の上にずりあげながら歩き始める。入口の右手には雑誌の棚があり、左手にはシャンプーだの洗剤だの、日用品が並んでいる。逸子はトイレットペーパーが残り少なくなっていたのを思い出し、棚の上のほうから四個人りのパックを取った。スーパーへ行くと、トイレットペーパーや洗濯洗剤などは、安売りになっているものしか買わないのに、ストックがなくなりかけているときにコンビニで目につくと、どういうわけか、なんの考えもなくひよいとカゴに入れてしまうのが、我ながらおかしい。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。